

健康教育とレクリエーション・リハビリとの合同演習の各段階での学生の学び

木下 香織*・栗本 一美・古城 幸子・掛屋 純子

看護学科

(2008年11月12日受理)

本研究の目的は、地域看護学と老年看護学で実施した健康教育とレクリエーション・リハビリの合同演習の計画・実施・評価段階での学生の学びを分析し、合同演習の教育効果と教育上の課題を明らかにすることである。学生の自己評価用紙の記述内容を検討した結果、54サブカテゴリー、14カテゴリーが形成された。14サブカテゴリーから合同演習での学びの構造化を図り、【学生の思考と行動】、【対象との相互作用】、【評価】の3つの大きなカテゴリーにまとめることができた。学生は、対象者との援助的人間関係やヘルスプロモーションの視点など従来の演習方法での課題を挙げており、既習の知識と技術の応用や統合など教育効果を確認できた。しかし、計画段階では場の雰囲気づくりや参加者の反応の把握や交流への視点をもちにくいこと、実施段階ではチームワークを図って運営することや対象者のヘルスプロモーションについての意識は薄いことが明らかになった。

(キーワード) 合同演習、教育効果、健康教育、レクリエーション・リハビリ

はじめに

全国の看護師養成3年課程692校を対象とした2006年看護教育基礎調査¹⁾において、学内技術演習を実施しているのは老年看護学領域で78.1%、在宅看護論では88.8%と報告されている。本学の老年看護学では、パリアフリー体験学習²⁾や食事に関する援助³⁾、レクリエーション・リハビリの企画・運営・評価⁴⁾に関する演習を、地域看護学では健康教育に関する演習⁵⁾を行なってきた。

老年看護学領域で実施してきたレクリエーション・リハビリ(以下、レク・リハとする)の企画・運営・評価に関する演習では、高齢者役、援助者役、参加者役を交代で担当し相互評価する演習方法の意義が確認できたが、高齢者の運動性の障害など演習の基盤となる知識についての学生の理解が検討課題⁶⁾であった。また、地域看護学領域では、紙面上での健康教育を立案する演習を実施してきたが、対象者との援助的人間関係やヘルスプロモーションの視点をもちにくいことが課題であった。そこで筆者らは、看護職として健康問題を踏まえたレク・リハの企画・実施、集団を対象とした健康教育の実施をそれぞれの演習のねらいに追加し、2つの看護学領域で共通した対象者に健康教育とレク・リハを企画・実施・評価を行なう演習を試みた。

複数の看護学領域での合同演習の実施については、母

性・小児・地域看護の3領域での入江ら⁷⁾の報告があるが、150名の学生が希望する看護学領域を選択して実施する方法であり、関連する看護学領域が合同で実施した演習に関する報告はなかった。合同演習の試みとその教育効果を報告する。

I. 研究目的

老年看護学と地域看護学の合同で実施した演習の計画・実施・評価の各段階での学生の学びを分析し、合同演習の教育効果と今後の教育上の課題を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象：A短期大学看護学科2年次生65名のうち、研究参加への同意が得られた学生64名。

2. 研究方法：2007年12月に合同演習を実施した後に提出された演習記録のうち、自己評価用紙の自由記述欄「計画の立案」「参加者の反応と援助者の対応」「演習内容の評価できる点と改善点」を分析対象とした。記述内容を一文一意味で取り出し、意味内容ごとに整理しカテゴリー化した。分析の信頼性と妥当性を高めるため、研究者間で検討を重ねた。

3. 倫理的配慮：学生には、研究者が口頭にて研究の目

*連絡先：木下香織 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

的、演習記録を分析すること、個人が特定されないようデータは匿名で処理し本研究以外では使用しないこと、成績評価には一切影響しないこと、参加は自由意志でいつでも同意を撤回できることを説明し、研究協力への同意を得た。

Ⅲ. 演習方法

1. 対象者の設定：模擬対象者は、老年期に起こりやすい健康問題や生活障害を踏まえ、表1に示した5つの条件の高齢者を設定した。⑤のアルツハイマー型認知症の設定では、健康教育の対象を認知症高齢者の家族とした。
2. 計画立案：学生は、7～9人程度のグループを主体的に組み、グループで1つの設定対象を選択し、対象者に合わせた健康教育とレク・リハのテーマや内容を計画し、所定の用紙で提出する。教員は、提出された企画案について、目的と内容の関連性、運営上の留意点などを確認し、修正の必要性を学生と検討する。2007年度の学生の計画内容を表2に示した。
3. 発表：企画したグループの学生が援助者役を行ない、高齢者役は他のグループが交替で担当し、その他の学生は観察者役とした。1グループの発表時間は20分で、健康教育を9分、レク・リハを11分とした。
4. 評価：高齢者役・観察者役による他者評価と、援助

者役の学生による自己評価を行なった。

他者評価は、各7～8人のグループで検討し1枚の用紙に記入した。評価内容は、健康教育とレク・リハそれぞれについて、目的や内容の理解度、資料の内容や安全面の配慮など方法の適切さ、言葉使いやコミュニケーション、日常生活への活用度の計16項目で、各項目6点満点とした。

自己評価は、援助者役の1人1人が評価用紙に記入した。健康教育とレク・リハそれぞれについて、企画に関する4項目、実践に関する7項目、総合して援助者としての役割を振り返る5項目の内容の評価用紙を用いて、各項目4点満点で評価した。また、計画立案・実施時の参加者の反応と援助者の対応、実施した内容の評価できる点と改善点、自分自身の役割について、自由記述を求めた。

Ⅳ. 結果

1. 合同演習での学びの構造

演習記録から853件の記述を取り出した。記述内容の類似性を検討した結果、54のサブカテゴリー、14のカテゴリーが形成された(表3)。14のカテゴリーから、合同演習での学生の学びの構造化を図った(図1)。以下、《》はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリー、【】は大カテゴリーを表わす。

学生は、演習準備のために〈学習資源の活用〉や〈教員のアドバイスの活用〉を図って《学習の方法》を工夫していた。〈対象の理解〉などの《専門的知識》を確認したうえで《演習の実践方法》を計画している。《実習の実践方法》を計画するにあたり、学生は〈健康教育とレク・リハの関連性〉〈目的と内容の関連性〉を意識しながら、〈参加者の関心のあるテーマの設定〉に努めている。〈豊かな知識と経験が必要〉〈根拠となる知識が必要〉など、看護専門職としての知識の重要性を感じるとともに、

表1 合同演習の対象者の設定

①車椅子利用の高齢者
②片麻痺のため杖歩行の高齢者
③虚弱高齢者
④白内障などによる視覚障害のある高齢者
⑤アルツハイマー型認知症の高齢者

表2 2007年度の合同演習の企画内容

	グループ	健康教育	レクリエーション・リハビリ
①車椅子利用の高齢者	1	車椅子とよりよい関係を きずいていくために	音楽に合わせて楽しくトレーニング
	2	よりよい車椅子生活☆	楽しい体づくり☆
②片麻痺のため杖歩行の高齢者	3	もう転ばない!!	動かしちゃいなよ!自分のからだ!!
	4	知って得する転倒情報! ? - マヒと共に生きる-	麻痺のためのイメージ体操
③虚弱高齢者	5	いつまでも元気でいきいきと暮らすために	頭を働かせて長生きしよう!!!
	6	食生活を見直そう ～今日からできる健康な食生活～	簡単♪家の中での体作り!!
④視覚障害のある高齢者	7	白内障ってどんな病気?	さあ玉入れだ
⑤アルツハイマー型認知症の高齢者	8	アルツハイマー症状との 上手な付き合い方	一緒に過去へタイムトラベルしよう!!

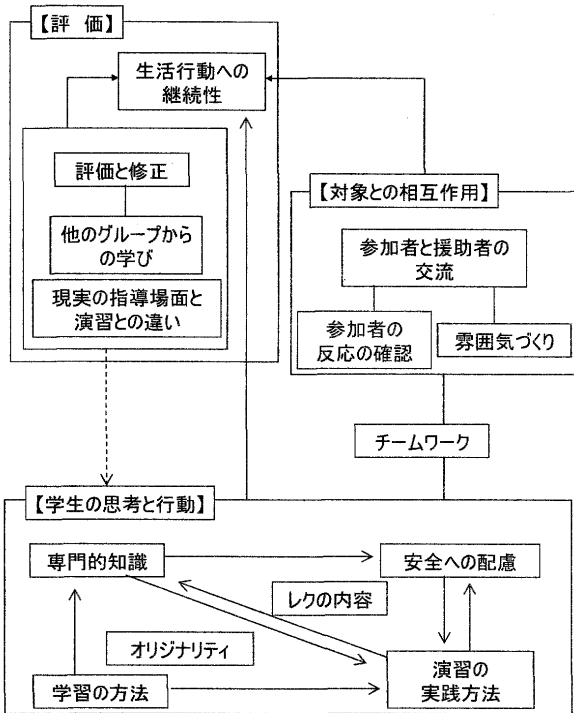


図1 合同演習での学生の学びの構造

《安全への配慮》をしており、【学生の思考と行動】としてまとめた。

学生は、《チームワーク》の重要性を感じている。演習の実践における《援助者のチームワークの大切さ》、《参加者同士のチームワーク》とともに、演習の《計画段階のチームワーク》も学んでいた。

《参加者の反応の確認》と楽しめる《雰囲気づくり》をしながら、《参加者と援助者の交流》を実感している。これらは【対象との相互作用】としてまとめた。《参加者の反応の確認》では、《参加者の反応の把握》をし、《参加者の反応への対応》をおこなうことで、《個別的な対応による安心感》が得られていることも学んでいた。《雰囲気づくり》では、積極的な参加や質問を促す明るい雰囲気づくりの重要性とともに、《援助者も一緒に楽しむ》ことが雰囲気づくりに欠かせないことも学び得ていた。《参加者と援助者の交流》では、参加者同士の交流と参加者と援助者の交流の両側面に視点をあてており、《参加者とのやりとりが大切》だと感じていた。

《他のグループからの学び》や《現実の指導場面と演習との違い》を感じながら《評価と修正》をしている。また、健康教育やレク・リハの内容の評価として、《生活行動への継続性》を挙げていた。指導の展開方法としての《対象者参加型の必要性》や、《日常生活に役立つ内容》《家庭でも継続して実践できる内容》であることの大切さを学んでいた。これらは【評価】としてまとめた。

表3 合同演習の演習記録の記述内容 (n=853)

カテゴリー	件数	サブカテゴリー
学習の方法	11	学習資源の活用(5)
		既習の知識の活用(1)
		教員のアドバイスの活用(4)
		今後の学習への活用(1)
専門的知識	90	対象の理解(14)
		健康教育とレク・リハの関連(9)
		目的と内容の関連性(10)
		豊かな知識と経験が必要(6)
		根拠となる知識が必要(3)
		参加者の関心のあるテーマの設定(17)
		参加者の立場で考える必要性(18)
		計画立案の難しさ(13)
		レクの内容
オリジナリティ	1	オリジナリティがあった(1)
演習の実践方法	224	計画の意図を方法に反映(12)
		限られた時間内で実践できる方法(6)
		参加者にあつたペースで展開(6)
		参加者の状況にあわせた方法の工夫(11)
		時間配分の工夫と効果的な運営(47)
		具体的な役割の内容(40)
		実践に向けて計画の洗練(14)
		進行方法の工夫(4)
		デモンストレーションの重要性(3)
		リハーサルの必要性(11)
		理解を助ける教材の工夫(42)
		ポスターなど視覚的な工夫が必要(14)
		説明の言葉使いや声の大きさなど大切(14)
安全への配慮	50	危険の察知と安全性の確保(46) スペースなどの環境設定(4)
雰囲気づくり	69	参加しやすい雰囲気づくり(16)
		質問しやすい雰囲気づくり(6)
		雰囲気を明るく盛り上げる(14)
		効果を高め、参加を促す関わり(15)
		援助者も一緒に楽しむ(18)
参加者の反応の確認	127	予測される参加者の反応(5)
		参加者の反応の把握(99)
		参加者の反応への対応(4)
		個別的な対応による安心感(3)
		参加者の反応による援助者の心理(16)
参加者と援助者の交流	39	参加者同士の交流への工夫(7)
		参加者と援助者の一体感(13)
		参加者とのやりとりが大切(19)
チームワーク	21	計画段階でのチームワーク(9)
		援助者のチームワークの大切さ(10)
		参加者同士のチームワーク(2)
他のグループからの学び	3	他のグループからの学び(3)
現実の指導場面と演習との違い	2	現実の指導場面と演習との違い(1)
		現実のレク・リハ場面と演習との違い(1)
評価と修正	165	計画と実施内容の評価(120)
		計画の評価と修正の気づき(30)
		評価のための反応の確認(15)
生活行動への継続性	40	日常生活に役立つ内容(11)
		家庭でも継続して実践できる内容(26)
		対象者参加型の必要性(3)

2. 計画・実施・評価の各段階での学び

健康教育、レク・リハの計画・実施・評価の各段階における853件の記述の分布は、表4のとおりであった。以下、《》はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリーを、「」は

コードを表わす。また、コードに付した「健:」は健康教育での記述、「レ:」はレク・リハでの記述を意味する。

1) 計画段階

計画段階では、《学習の方法》、《専門的知識》、《演習の実践方法》、《チームワーク》に関する記述が多く、【学生の思考と行動】を中心とした分布であった。

《学習の方法》は計画段階のみに記述されていた。《学習資源の活用》では「健:考えるだけでなく、調べることも重要だと感じた」「レ:レクの本を参考にして面白そうで簡単な運動を考えた」など、《教員のアドバイスの活用》では「レ:最初の案では体操を考えていたので、アドバイスがなければ回想法は思いつかなかった」などの記述があった。

《専門的知識》は、課題によってサブカテゴリーの記述数に違いがみられた。健康教育では、「健:テーマを考える際には、日常生活で対象者が困っていることから考えることが大切」などの《参加者の関心のあるテーマの設定》に関する記述が多かった。レク・リハではすべてのサブカテゴリーに記述があり、「レ:負荷をどのくらいかけて行うのが良いか悩んだ」などの《参加者の関心のあるテーマの設定》が最も多かった。その他、「レ:計画を立案するときには目的をきちんと念頭に置かなければならない」などの《目的と内容の関連性》、「レ:対象者が健康教室で学んだことを、身体を動かすことによって

改善できるように立案した」などの《健康教育とレク・リハの関連性》、「レ:虚弱高齢者についての知識をつけて計画しないといいものがない」などの《対象の理解》に関する記述も多かった。

《演習の実践方法》では、《具体的な役割の内容》が多く、「健:ストップウォッチでの時間配分と司会」、「健:高齢者の観察」など健康教育に関する記述のみであった。健康教育ではその他に、「健:短い時間で重要なことをどのように伝えればよいのか悩んだ」などの《時間配分の工夫と効果的な運営》「健:パンフレット作成で文字を大きくし、絵を加えて、言葉の表現方法など配慮が必要だった」などの《理解を助ける教材の工夫》に関する記述も多かった。レク・リハでは、「レ:計画立案は具体的に詳しく細かいところまで計画していく必要がある」など《実践に向けて計画の洗練》に関する記述が多かった。

《チームワーク》では、「レ:皆で意見を出し合いながら決めていくことができてよかった」などから《計画段階でのチームワーク》、「健:メンバーのサポートで無事に終えた」などから《援助者のチームワークの大切さ》が形成されていた。

2) 実施段階

実施段階では、《雰囲気づくり》、《参加者の反応の確認》に関する記述が多く、【対象との相互作用】が中心であった。

表4 演習の各段階での学生の学び (n=853)

カテゴリー	サブカテゴリー	計画		実施		評価		計
		健康	レク	健康	レク	健康	レク	
学習の方法	学習資源の活用	4	1					5
	既習の知識の活用		1					1
	教員のアドバイスの活用		4					4
	今後の学習への活用	1						1
専門的知識	対象の理解	3	6	5				14
	健康教育とレク・リハの関連	1	7			1		9
	目的と内容の関連性	2	8					10
	豊かな知識と経験が必要		1	1		3	1	6
	根拠となる知識が必要		3					3
	参加者の関心のあるテーマの設定	9	1			7		17
	参加者の立場で考える必要性	2	16					18
	計画立案の難しさ	7	5			1		13
レクの内容		8		3			11	
オリジナリティ	オリジナリティがあった					1		1
演習の実践方法	計画の意図を方法に反映	3	1	1		2	5	12
	限られた時間内で実践できる方法	5	1					6
	参加者にあったペースで展開			6				6
	参加者の状況にあわせた方法の工夫						11	11
	時間配分の工夫と効果的な運営	22	5			9	11	47
	具体的な役割の内容	40						40
	実践に向けて計画の洗練	1	13					14
	進行方法の工夫	2				2		4
	デモンストレーションの重要性	1				2		3
	リハーサルの必要性	2	2			4	3	11
	理解を助ける教材の工夫	12		3			27	42
	ポスターなど視覚的な工夫が必要					14		14
	説明の言葉使いや声の大きさなど大切	6				8		14
	危険の察知と安全性の確保	8	7	4	14	2	11	46
安全への配慮						4	4	

カテゴリー	サブカテゴリー	計画		実施		評価		計
		健康	レク	健康	レク	健康	レク	
雰囲気づくり	参加しやすい雰囲気づくり			16				16
	質問しやすい雰囲気づくり					6		6
	雰囲気明るく盛り上げる		1	7		1	5	14
	効果を高め、参加を促す関わり				11		4	15
参加者の反応の確認	援助者と一緒に楽しむ			1	1			16
	予測される参加者の反応		4					1
	参加者の反応の把握	6		32	39	14	8	99
	参加者の反応への対応			3				1
参加者と援助者の交流	個別の反応による安心感			3				3
	参加者の反応による援助者の心理		1	8	7			16
	参加者同士の交流への工夫					2	5	7
	参加者と援助者の一体感		2	5	6			13
チームワーク	参加者とのやりとりが大切					16	3	19
	計画段階でのチームワーク	4	3			1	1	9
	援助者のチームワークの大切さ	3	2		1	2	2	10
他のグループからの学び	参加者同士のチームワーク		1				1	2
	他のグループからの学び		1	1				1
現実の指導場面と演習との違い	現実の指導場面と演習との違い			1				1
	現実のレク・リハ場面と演習との違い				1			1
評価と修正	計画と実施内容の評価	4	11	35	39	7	24	120
	計画の評価と修正点の気づき		1	6		6	17	30
	評価のための反応の確認				15			15
生活行動への継続性	日常生活に役立つ内容	1				10		11
	家庭でも継続して実践できる内容		13				13	26
	対象者参加型の必要性	3						3

《雰囲気づくり》は、課題によってサブカテゴリーの記述数に違いがあった。健康教育では、「健：積極的に話をしてもらえように働きかけることが必要だと思った」など、〈参加しやすい雰囲気づくり〉に多くの記述があった。レク・リハでは「レ：思い出そうとすることが脳を活発に働かせるので、できたところを褒めることも大切」など〈効果を高め、参加を促す関わり〉、「レ：手拍子などで盛り上げられてよかった」など〈雰囲気を明るく盛り上げる〉に関する記述が多くみられた。

《参加者の反応の確認》では、「健：理解できているか、分からないところがあるかを確認する必要があったと思う」、「レ：手の動きがわからなかったり、疲れたりしていた」など、〈参加者の反応の把握〉に関する記述が多かった。〈参加者の反応による援助者の心理〉では、「健：反応が返ってこないときは、すごくむなしい気持ちになるんだなと思った」、「レ：だんだん笑顔になってうれしかった」などであった。

《現実の指導場面と演習の違い》は、実施段階のみに記述があった。「健：対象が本当の家族の場合は、おそらくアルツハイマーの症状に対してさまざまなパターンの対応例について質問があると考えられるので、十分な準備が必要になってくる」、「レ：回想法の本は、高齢者にとっては懐かしい写真がいっぱいでも、さすがに20歳にとっては物珍しいだけのようだった」と記述されていた。

3) 評価段階

評価段階は《学習の方法》《レクの内容》《現実の指導場面と演習の違い》以外の全てのカテゴリーに関する記述があった。

《演習の実践方法》では、課題によってサブカテゴリーの記述数に違いがあった。健康教育では、「健：字の大きさ、文と文の間隔などに注意して作成できた」などの〈理解を助ける教材の工夫〉、「健：評価できる点は、ポスターで視覚的に訴えられたこと」などの〈ポスターなど視覚的な工夫が必要〉に関する記述が多かった。レク・リハでは、「レ：高齢者が楽しめるように、なるべく玉がカゴに入るように工夫したのは良かった」などの〈参加者の状況にあわせた方法の工夫〉、「レ：レク・リハの内容が参加者の反応や残り時間によって調節できる内容だったので、余裕をもってできた」などの〈時間配分の工夫と効果的な運営〉に関する記述が多くみられた。

《雰囲気づくり》では、「レ：援助者も一緒に楽しんですれば、もっと楽しい時間をすごしてもらえ」などから〈援助者も一緒に楽しむ〉、「健：座る席の配置など、もっと質問しやすい雰囲気にしたらよかった」などから〈質問しやすい雰囲気づくり〉が形成されていた。

《参加者の反応の確認》では、「健：生活上の問題や対策の理解について反応をうかがうべきだった」、「レ：対象者の反応を見ながらペースをつくっていくことが大切

など〈参加者の反応の把握〉に関する記述が多かった。

《参加者と援助者の交流》では、「健：参加者とのやりとりにより焦点をおき、参加者の視点で話したことが良かった」、「レ：質問に返答がないので、質問を変えて問い直してきたことが評価できる」など〈参加者とのやりとりが大切〉についての記述が多くみられた。

《生活行動への継続性》では、健康教育では「健：具体的な対応例を挙げたので役に立つと思う」などの〈日常生活に役立つ内容〉、レク・リハでは「レ：家でも簡単にできそうな運動の紹介ができた」など〈家庭でも継続して実践できる内容〉に関する記述が多かった。

4) その他

《安全への配慮》、《評価と修正》はすべての段階で記述がみられた。

《安全への配慮》は、計画段階の「健：事故が起こる前にその可能性を考えて危険を予測することが大切」、実施段階の「レ：椅子に座っていても体はよく動くので、椅子から落ちないように観察した」、評価段階の「レ：危険を感じた時に瞬間的に手を差し出せる位置に立つ必要性を感じた」などから〈危険の察知と安全性の確保〉が形成された。〈スペースなどの環境設定〉はレク・リハの評価段階のみで、「レ：体操のとき、隣の人と手が当たるのでスペースの確保が必要」などの記述がみられた。

《評価と修正》は、計画段階の「レ：足や手を使って楽しめる内容だった」、実施段階の「健：クイズを考えることで意欲的に参加してもらえた」、評価段階の「レ：簡単な歌で選曲が良かった」などから〈計画と実施内容の評価〉が形成された。「健：クイズにすると、理解度が確認できてよかった」、「レ：みんなで写真を見て話せるように拡大コピーすればよかった」などから〈計画の評価と修正点の気づき〉が形成されたほか、〈評価のための反応の確認〉は「レ：新聞を丸めるときに手が滑ると思っていたが、きちんとできていた」などで、レク・リハの実施段階のみ記述があった。

V. 考察

1. 合同演習の教育効果

形成した14のカテゴリーは、【学生の思考と行動】、【対象との相互作用】、【評価】の3つの大きなカテゴリーにまとめることができ、計画・実施・評価の演習経過に沿うものであった。

従来実施していた紙面上での健康教育の立案では、対象者との援助的人間関係やヘルスプロモーションの視点をもちにくいことが課題であった。合同演習では、《雰囲気づくり》、《参加者の反応の確認》、《参加者と援助者の交流》といった、実践の場と対象との関わりを模擬体験する演習でなければ学べない内容が挙げられた。

また、《生活行動への継続性》では、学生が対象者の行動変容につながることを期待して計画立案していることがうかがえた。実践形式の演習をおこなうことで、実習経験の少ない2年次学生が、紙面上ではイメージしにくい対象者の生活像をより豊かに描くことができると考える。

従来のレク・リハ演習では、学生が主体的にレク・リハを企画し、企画・運営する援助者役の学生と高齢者役や観察者役の学生とが相互に評価することで、'高齢者の視点と専門的な視点で評価できる'、'他の学生の演習内容に関心が高まる'という教育効果が明らかになっていた⁸⁾。合同演習のねらいは、看護職として健康問題を踏まえたレク・リハの実施⁹⁾であった。《専門的知識》では、対象者に設定した高齢者の老化に伴う機能低下や特徴的な健康問題を含めて、専門職としての知識の必要性を学んでいた。また、《演習の実践方法》や《安全への配慮》では、プレゼンテーション能力の発揮やリスクマネジメントの意識を活用するものであり、学生は既習の知識と技術を応用、統合していることがうかがえる。

平木¹⁰⁾は、グループで課題に取り組む学内演習は、実習グループの協働関係の構築と建設的な対人関係の訓練につながると述べている。《チームワーク》では、実践段階での〈援助者のチームワークの大切さ〉だけでなく〈計画段階でのチームワーク〉も挙げられていた。従来の演習方法の教育評価では確認できていなかった内容であった。

以上のことから、合同演習が従来の演習方法の教育改善につながっていること、臨地実習や卒業後の実践に役立つ教育効果があることを確認できた。

2. 演習の各段階における学生の学びと今後の課題

計画段階では、《専門的知識》の必要性や〈具体的な計画内容〉などの《演習の実践方法》に関する記述が中心で、《雰囲気づくり》や《参加者の反応の確認》《参加者と援助者の交流》に関する記述は少なかった。計画段階での学生は、援助者の行動に重点を置いており、実施する場の雰囲気をどのようにつくるか、参加者の反応をどうとらえ交流を深めるか、といった視点をもちにくいことが明らかになった。

実施段階では、《雰囲気づくり》や《参加者の反応の確認》に関する記述が中心で、《チームワーク》や《生活行動への継続性》に関する記述が少なかった。実施段階での学生は、対象者に視点を置いているものの、チームワークを図って運営することや対象者のヘルスプロモーションについての意識は薄いことがうかがえる。演習では、老年期に起こりやすい健康問題や生活障害をふまえた模擬対象者を設定しているが、対象者の生活像やニーズ、期待されるゴールが具体的にイメージしにくいことがヘルスプロモーションの意識の薄さの原因と考えられた。対象の理解について、老化や疾病による生活障害、

対象者に予想される反応や期待する効果をより具体的にイメージした計画の立案ができるよう、設定に基づいた事例の提供とともに計画段階から意識づけをおこなっていききたい。

《安全への配慮》《評価と修正》は、計画・実施・評価のすべての段階で記述があった。《安全への配慮》については、高齢者への看護場面における学生の安全管理に対する意識の高さを意味し、評価できる。また、《評価と修正》については、3年次の老年看護学、地域看護学の臨地実習で在宅高齢者を対象に企画・運営しているサテライト・デイ¹¹⁾での実践につながることを期待される。相互評価の結果を演習の企画にフィードバックする(図1の破線部)ことも今後の課題である。演習記録に評価を踏まえた修正案の記載を求めるなど、演習方法の工夫も検討していきたい。

文献

- 1) 日本看護協会政策企画部：2006年看護教育基礎調査。日本看護協会調査研究報告，1-94，2007
- 2) 古城幸子，木下香織，馬本智恵：学生の主体的な企画と相互評価を取り入れた老年看護学演習の効果 - 第2報「バリアフリー体験学習」-。看護・保健科学研究誌，6(2)，43-49，2006
- 3) 古城幸子，木下香織：老年看護学演習「栄養状態の変調」の教育方法の検討。日本看護学会論文集-看護教育-，34，85-87，2003
- 4) 木下香織，古城幸子，馬本智恵：学生の主体的な企画と相互評価を取り入れた老年看護学演習の効果 - 第1報「身体運動性の障害」-。看護・保健科学研究誌，6(2)，77-83，2006
- 5) 栗本一美，掛屋純子：「健康教室」演習を取り入れた教育効果 - 学生の自己・他者評価を分析して-。新見公立短期大学紀要，28，93-99，2007
- 6) 前掲4)
- 7) 入江晶子，神崎江利子，黒野智子ほか：健康教育を軸とした母性・小児・地域看護領域の連携。聖隷クリストファー大学看護学部紀要，15，11-20，2007
- 8) 前掲4)と同じ
- 9) 木下香織，古城幸子：レクリエーション・リハビリの企画における健康問題への看護学生の意識-高齢者援助技術「身体可動性障害」演習の教育効果。新見公立短期大学紀要，28，29-34，2007
- 10) 平木民子：看護学教育における臨地実習前の学内演習の意義 - 日本赤十字広島看護大学のカリキュラム-。Quality Nursing, 8(10)，6-10，2002
- 11) 古城幸子，木下香織，栗本一美ほか：平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラムに選定 地域のニ

ーズに応える看護専門職養成 - 在宅高齢者支援プログラムとサービス・ラーニング - 新見公立短期大学
紀要, 27, 159-167, 2006

**Students' learning in each stage of the joint practice of health education
and recreational rehabilitation**

Kaori KINOSHITA, Kazumi KURIMOTO, Sachiko KOJO, Junko KAKEYA

Summary

The purpose of this study was to investigate students' learning in each of the planning, implementation, and evaluation stages of the joint practice of health education and recreational rehabilitation, which had been conducted in the classes of community and geriatric nursing, respectively, to identify the educational effects and future challenges to education of the joint practice. Students' descriptions in a self-evaluation questionnaire were classified into 14 categories, which were integrated into 3 large categories: "the student's thoughts and behavior," "interactions with the subject," and "evaluation." Some students mentioned assisting personal relationships with the subject and the viewpoint of health promotion, which were challenges to conventional methods for practice. With such an application/integration of existing knowledge and skills, certain educational effects beneficial to on-the-job training as well as post-graduation practicing were identified. However, it was also revealed that, in the planning stage, students put more emphasis on their assisting behavior, being less likely to pay attention to creating a favorable atmosphere, monitoring participants' responses, and communicating with them, and that, in the implementation stage, they were less aware of conducting the practice as a team and promoting the subject's health.

Keywords: joint practice, educational effect, health education, recreational rehabilitation